



OIST 2026国際外部評価 第3回国際外部評価報告書





OIST 国際外部ピアレビュー (iEPR) 2026

目的

前々回（2015年）及び前回（2019-2020年）に続き、理事長兼学長が外部有識者を招集して機関レベルの外部ピアレビューを実施。OISTの教育研究機関としてのパフォーマンスを国際的な見地から客観的に評価させ、世界最高水準という目標達成に役立てる。

評価項目

研究・教育の実績	ガバナンスの有効性
学際的研究エコシステム	財務の持続可能性
知的資本及びイノベーション連携	寄付金獲得能力

スケジュール

- 3月：第1回会合
- 4月：第2回会合
- 5月：第3回会合（iEPRメンバーのみのワーキング会合）
- 6月：地域貢献・地域連携に関するインタビュー
iEPR 2026による暫定的な所見及び提言のOIST理事会への報告
- 7月：iEPR 2026最終報告書（英語版、日本語版）を学長へ提出
- 8月：iEPR 2026報告書（日本語版、英語版）を内閣府へ提出
- 10月：理事会会議におけるiEPR 2026の最終報告プレゼンテーション



国際外部評価委員会 (iEPR) 2026のメンバー

スティーブン・チュー教授
(スタンフォード大学)

大野 英男教授
(東北大学)

シンシア・フレンド教授(名誉教授)
(ハーバード大学／カブリ財団、5月に辞任)

ロバート・ペリッチ教授
(スイス公共ガバナンス大学院／ETHチューリッヒ)

ロバート・ランガー教授
(マサチューセッツ工科大学)

トーマス・ローゼンバウム教授
(カリフォルニア工科大学)

イエンス・ニールセン教授
(バイオイノベーション研究所／チャルマース工科大学)

ドナテッラ・シュート教授
(ミラノ工科大学)

※内閣府沖縄科学技術大学院大学学園の今後の在り方に関する検討会座長はオブザーバーとして参加



OIST 2026国際外部評価 2026年3月-5月実施

パネルの総合評価は非常に肯定的

「OISTは、日本の科学技術と経済の将来にとって不可欠な資産である。」

「OISTは、設立時の理念と構想の正しさを実証し、世界トップレベルの研究成果をあげるとともに、次なる成長段階に向けた組織基盤を築き上げた。」

「OISTモデルは極めて有効である。しかし、その長期的な持続性を確かなものとするためには、戦略的な規模拡大を進め、十分な研究規模（クリティカル・マス）を形成することが不可欠である。」

「今後の最優先課題は、慎重かつ戦略的に規模を拡大することである。具体的には、重点研究分野の強化、安定的かつ十分な財源の確保、そしてOISTの成功を支えてきた文化を維持・発展させることである。」



総括

総合評価

- OISTは、世界をリードする研究大学と肩を並べて競争できる、日本で唯一の大学としての地位を確固たるものとした※。
- 研究科を設けない組織、PI(主任研究者)を中心とした研究体制、公用語としての英語、そして世界中から人材を採用する仕組みという独自のモデルは、持続的な競争優位性として十分に実証されている。

主要提言

- OISTの自律性、学際性、そして高い知的志向という中核的な文化を維持しつつ、**PI数200名を目標**とした戦略的な規模拡大を進めること。
- **研究分野を重点化**し、オープンセンターモデルを活用して、幅広い分野を網羅するのではなく、十分な研究規模(クリティカル・マス)を形成し、世界的な研究拠点を構築すること。
- 教員数の増加に応じて、**コア・ファシリティの運営予算および研究設備更新計画を拡充**すること。これらの研究基盤は、世界トップレベルの研究者を惹きつける上で決定的な要素である。
- **円安による影響を踏まえ、OISTで働くことの実質的な処遇価値(購買力)や沖縄での生活の質といった利点を分かりやすく示す透明性の高い情報発信**を行うこと。
- キャンパス内での交流やコミュニティ形成を積極的に促進し、**日常的・非公式な研究者間の交流を通じた学際的な共同研究を一層活性化**すること。

※ OISTの論文の12%以上が、被引用数で世界上位10%に入っており、日本平均の約2倍に達している。また、研究規模を考慮した研究力は、ISTA(オーストリア)、ロックフェラー大学(米国)、ワイツマン科学研究所(イスラエル)など、OISTと類似する世界トップクラスの研究機関と比べても遜色のない水準にある。



最終提言(1/2)

- OISTは、あらゆる主要な指標において世界トップレベルの研究機関へと発展した。一方で、長期的な持続性を確保し、国際的な競争力をさらに高めるためには、十分な研究規模(クリティカル・マス)の形成が不可欠である。
- OISTに求められているのは、重点研究分野における知的厚みの形成、分野横断的な研究の継続・発展、そして教育・イノベーションの潜在力を最大限に引き出すために必要な規模の拡大である。
- OISTは、約100名のPI(主任研究者)という小規模な体制でありながら、世界トップクラスの研究大学と競争できる日本唯一の大学である。論文の12%超が世界の被引用数上位10%に入り、その研究インパクトは国内の他大学を大きく上回っている。
- 複数の研究科を設けないPI中心の組織モデルは、真に学際的な研究を可能にするものとして高く評価されており、研究者の採用・評価制度も国際的な水準に照らして極めて厳格かつ優れたものと認められている。
- OISTは、沖縄経済および日本の科学技術の国際的評価に具体的な成果をもたらす、力強く成熟しつつあるイノベーション・エコシステムを構築してきた。
- このイノベーション・エコシステムの構築は、研究活動の副次的成果ではなく、OISTの中核的な成果として位置付けられ、継続的に支援されるべきである。そのためには、PIによる産学連携・企業連携を支援するための専門的なコーポレート・リレーションズ機能をOISTとして整備・強化することが求められる。



最終提言(2/2)

- パネルは、OISTがPI(主任研究者)約200名体制への拡充を進めることを強く支持する。これは、OISTが掲げる高い理念を持続的に実現するために必要な研究規模(クリティカル・マス)であると評価している。
- 一方で、重要なのは規模の拡大そのものではなく、その進め方である。重点研究分野におけるクリティカル・マスの形成、OISTの独自性を支える学術文化の維持、さらに教員数の増加に見合ったコア・ファシリティや研究支援体制の整備を、戦略的に進めることが不可欠である。
- これらを着実に実現したOISTは、日本にとって研究力とイノベーションへの最も価値ある投資の一つとなるであろう。一方で、学際性と高い研究密度というOIST独自の文化を維持しながら規模を拡大することが、次の発展段階における最大の課題である。
- そのため、研究分野を戦略的に重点化し、コア・ファシリティの更新・強化を進めるとともに、円安が教員給与や国際的な人材獲得競争に及ぼす影響など、財政面の脆弱性にも適切に対応することが重要である。



重点研究分野と今後の成長領域

重点研究分野・研究クラスターの明確化

- OISTは、あらゆる科学分野を網羅することを目指すのではなく、重点研究分野を明確に定め、十分な研究規模（クリティカル・マス）、知的厚み、そして世界的なプレゼンスを確立すべきである。
- オープンセンター構想は、その実現に向けた有望な仕組みであり、重点分野を戦略的に選定するとともに、研究の進展に応じて柔軟に発展できる運営とすることが重要である。

沖縄の特色を生かした研究のさらなる展開

- OISTは、世界最高水準の研究と、沖縄の豊かな自然・文化・地理的特性を融合できる世界でも類例のない研究機関である。
- こうした特色は、地域課題と国の重要課題の双方に貢献するOIST独自の価値を示すものであり、今後の研究戦略における重要な強みとして一層発展させるべきである。

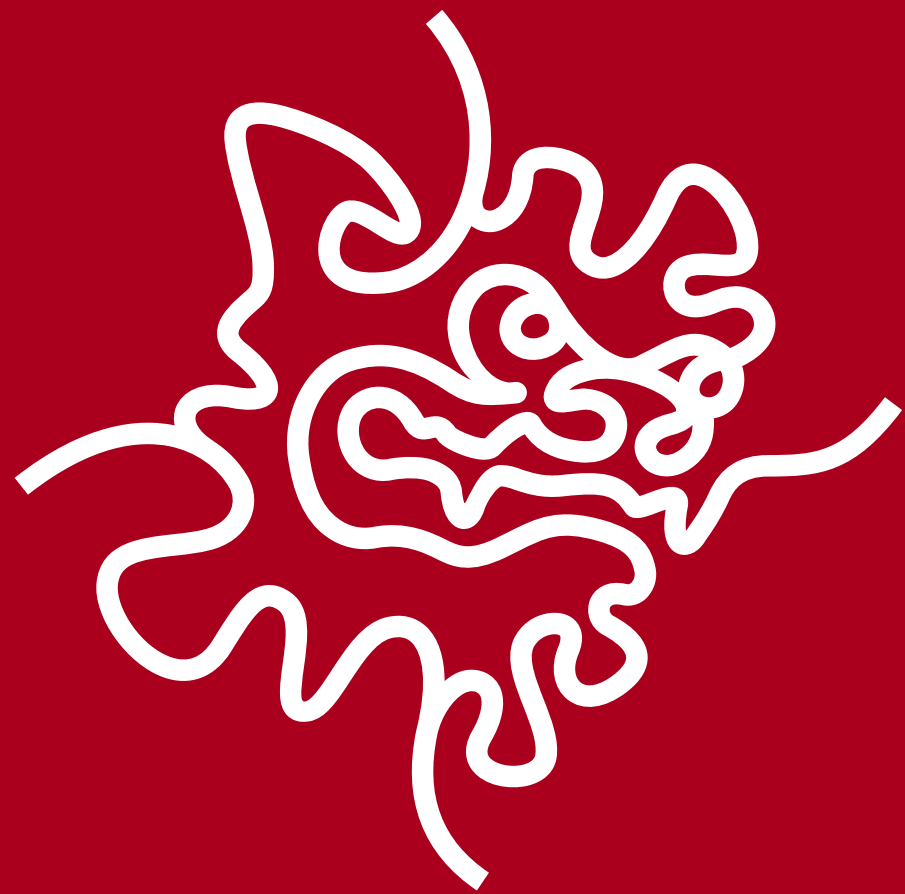


(参考)OIST 5x5計画への言及

- OIST 5×5計画で提案されている
 - 神経科学・AI
 - バイオテクノロジー におけるAI
 - プログラマブルマテリアル・フォトニクス
 - 気候変動に強い沿岸・食料システム
 - 生物多様性・生態系レジリエンス

といった新たなオープンセンター構想は、PI数を200名規模へ拡大する過程で学際研究を推進する有望な仕組みである。

- コアファシリティは世界最高水準であり、今後は設備更新に関する長期計画の策定や使用料の徴収を推奨。
- さらに、OISTでは、コアファシリティの利用に対して一定の費用負担を導入することを計画しており、これは、とりわけ過度な利用を防ぐことを目的としている。
- また、OISTの「5×5計画」は、競争的外部資金、寄附金、および産業界との連携を通じて、安定的な外部資金の基盤を毎年5%ずつ拡大することを目標としている。



Thank you



補足資料





OISTの独自かつ不可欠な存在価値

世界トップレベルの研究力

•OISTは、論文の被引用数、掲載誌の質、国際的評価など、あらゆる主要な研究指標において世界トップレベルの研究成果を挙げている。主要な計量指標では国内の他大学を大きく上回り、世界有数の研究機関とも肩を並べる研究力を有している。

学際的な基礎研究を支える独自の研究モデル

•学部・学科を設けず、PI(主任研究者)を中心とする組織モデルは、真に学際的な基礎研究を可能にするものであり、従来型大学では容易に実現できないOIST固有の競争優位性となっている。

イノベーションと経済への波及効果

•イノベーション創出は研究者数の拡大に伴って大きく伸びることが示されており、OISTへの投資は研究力の強化にとどまらず、日本経済への波及効果をもたらす極めて効果的な公共投資である。

沖縄と日本への貢献

•OISTは、雇用創出、科学教育、先端技術を核としたイノベーション拠点の形成を通じて沖縄の発展に直接貢献している。同時に、世界中から優秀な研究者を惹きつけ、大規模な国際共同研究を牽引できる研究機関として、日本の科学技術力と国際競争力の強化にも大きく寄与している。



OISTを支える学術文化

- OISTの成功を支える最も重要な要素の一つが、その学術文化である。この価値は極めて大きいにもかかわらず、その重要性は必ずしも十分に認識されていない。
- OISTは、高い志を持って研究に挑戦し、多様な研究者が分野の壁を越えて自由に協働し、研究の質のみを基準として評価される環境を築いてきた。こうした学術文化こそが、OISTの独自性の源泉である。
- この文化は自然に形成されたものではなく、大学として意図的に築き上げ、継続的に維持してきた重要な資産である。
- この学術文化こそが、世界中の優秀な研究者を惹きつけ、OISTの研究力と活力を支えている。
- 今後の規模拡大に当たっては、この学術文化の維持・発展を最優先課題として位置付けるべきであり、組織運営やガバナンスも、OISTの独自性を支える環境を守ることを前提として設計されなければならない。



日本の大学にはないOISTの独自性

世界に開かれた研究・教育環境

- ・英語を公用語とし、国籍を問わない採用方針の下、世界中から教員・学生を集めている。博士課程学生の80%以上が70か国を超える国・地域の出身者であり、この水準の国際性を実現している日本の大学は他に例がない。

学部・学科のない組織モデル

- ・従来の複数の研究科の枠組みを設けないことで、分野間の壁を取り払い、真に学際的な研究を促進する研究環境を実現している。

世界トップレベルの研究力

- ・論文の12%超が世界の被引用数上位10%に入り、日本平均の約2倍という卓越した研究インパクトを達成している。その水準は世界有数の研究機関にも匹敵する。

世界最高水準の研究基盤

- ・最先端のコア・ファシリティと、各研究ユニットへの柔軟な研究費配分を組み合わせることで、大規模大学に見られる過度な事務的制約を受けることなく、挑戦的な研究を推進できる環境を整備している。

世界トップクラスの博士教育

- ・博士課程の合格率は約3%と世界でも屈指の競争率を誇る。修了生は世界の主要大学・研究機関・企業で活躍し、OISTと日本の科学技術力を世界に発信する重要な担い手となっている。



参考資料





OISTの学術面でのインパクト

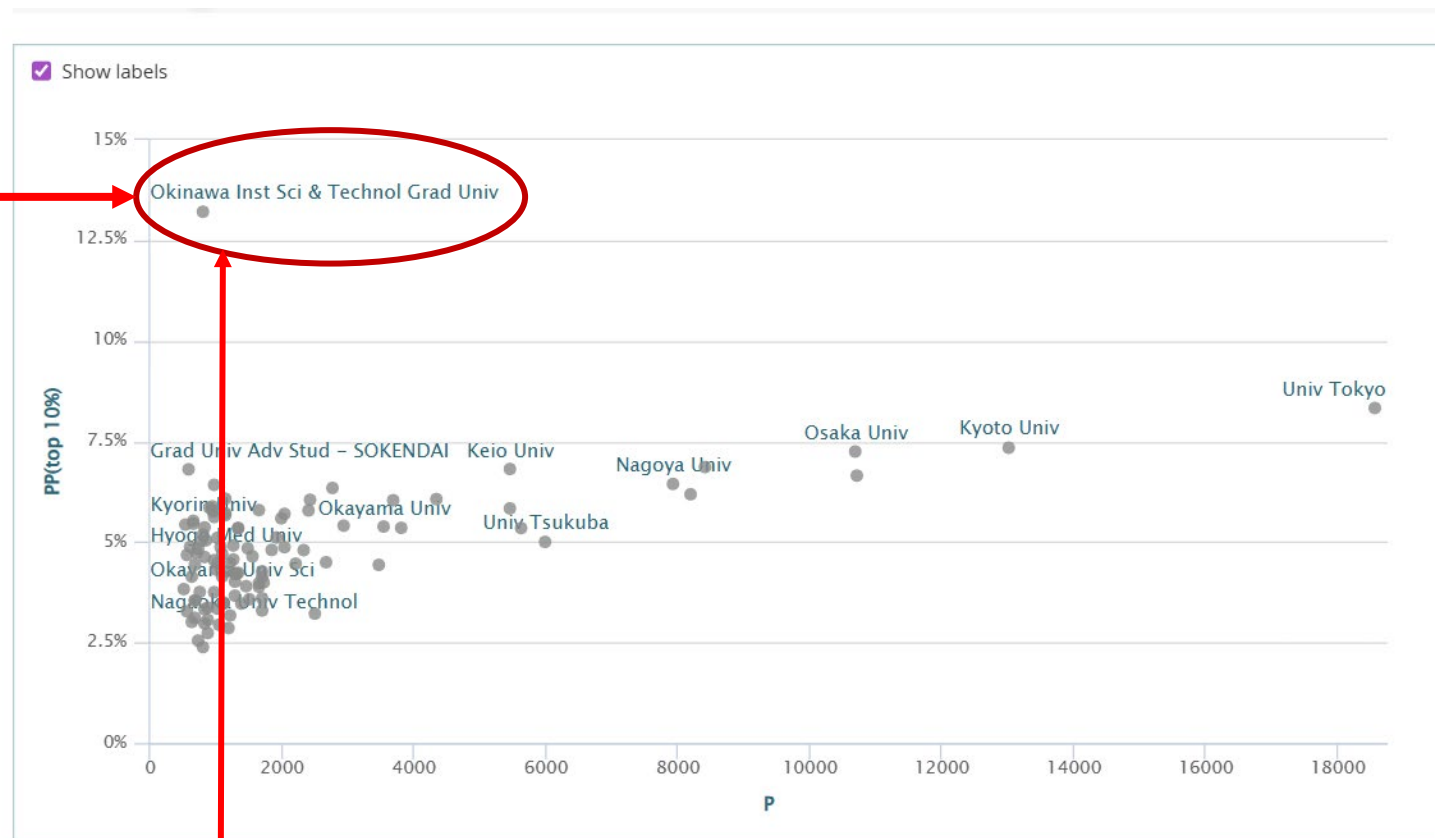
代表的なジャーナル



大きなインパクト

Impact

被引用数が同年・同分野の上位10%に入る論文の割合



小規模な機関

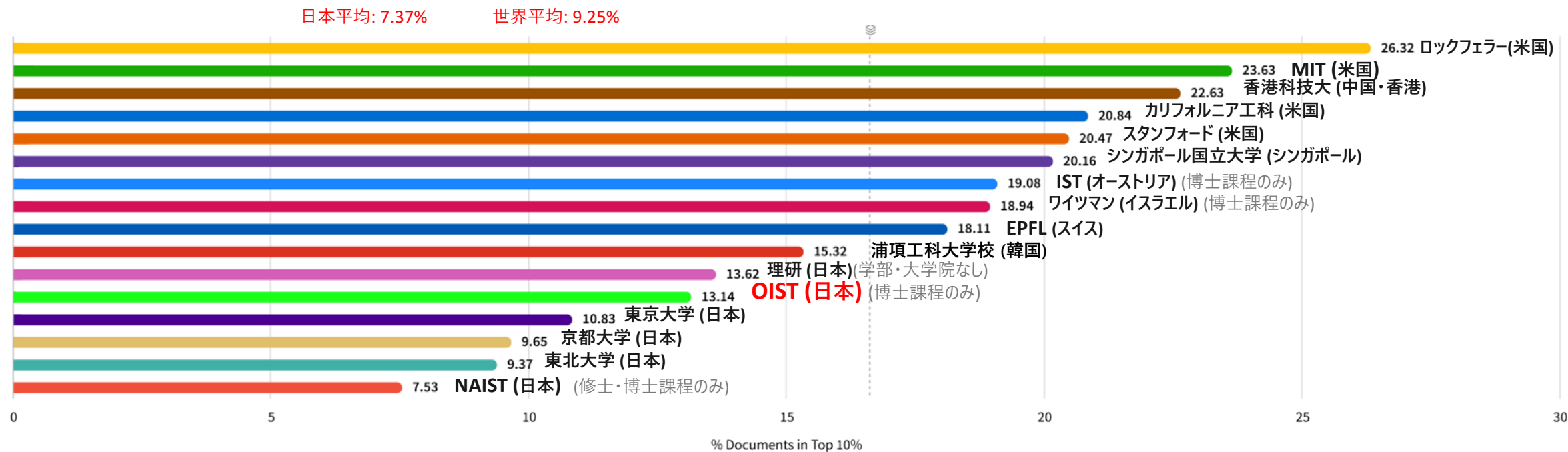
総論文数

CWTS, Leiden index 2025



OIST研究力のベンチマーク比較 国内外の主要研究大学との比較

被引用数上位10%論文比率（2021–2025年）



Baseline for All Items

Stanford University

Pohang University of Science & Technology (POSTECH)

Tohoku University

Rockefeller University

National University of Singapore (NUS)

RIKEN

Nara Institute of Science & Technology (NAIST)

Massachusetts Institute of Technology (MIT)

Institute of Science & Technology - Austria (ISTA)

Okinawa Institute of Science & Technology Graduate University

University of Tokyo

Hong Kong University of Science & Technology

Weizmann Institute of Science (WIS)

University of Tokyo

Kyoto University

California Institute of Technology (Caltech)

Ecole Polytechnique Federale de Lausanne (EPFL)

指標：被引用数上位10%論文の割合 対象期間：2021–2025年 データベース：Web of Science
出力日：2026年4月17日

InCitesデータセット更新日：2026年3月27日



国際外部評価委員会委員の選任基準と調査付託事項



2026年国際外部評価委員会委員の選任基準

iEPR委員の選任基準

- 各委員は、以下の基準のうち**少なくとも2項目**を満たすものとする。
- 自然科学またはその他のSTEM（科学・技術・工学・数学）分野において国際的に卓越した研究者であり、ERC、NSF、UKRI、JSPSなどの国際的または国内の研究・イノベーション資金配分機関におけるピアレビューの豊富な経験を有すること。
- 世界トップレベルの大学において、学長、副学長またはこれに相当する職を現に務めている、又は務めた経験を有すること。
- 国際的に卓越した研究機関（トランスレーショナル研究機関を含む。）において、所長その他これに相当する幹部職を現に務めている、又は務めた経験を有すること。
- 大学における基礎的な科学・工学研究から生まれた画期的な科学技術を基盤として、複数のスタートアップ企業を創業した実績を有すること。
- 国内トップレベルの大学又は研究機関において、マネージング・ディレクター、管理担当副学長その他これに相当する上級管理職を現に務めている、又は務めた経験を有すること。



調査付託事項

- 1 **学際的研究エコシステムのガバナンス及びマネジメント**: OISTの研究ユニット及び学際的研究の質と生産性を確保するために、現在整備されている研究組織、方針及び運営メカニズムを評価する。

特に、以下の観点から評価を行う。

- OISTは、世界トップレベルの研究大学と競争できるよう、学際的研究を促進するために最適化された効果的な組織体制を構築しているか。
- OISTは、各研究ユニットにおける専門分野としての研究の卓越性を確保するとともに、学内の研究クラスター形成や共同研究、さらに学外機関との研究連携を促進するための方針及び運営メカニズムを整備しているか。
- OISTがPI（主任研究者）数を100名から200名へ拡大した場合においても、学際的研究エコシステムは十分な持続性・柔軟性・堅牢性（レジリエンス）を維持できると期待できるか。



調査付託事項

2 研究及び教育:OISTの研究及び博士課程教育プログラムの範囲、質並びに国際競争力を評価する。

特に、以下の観点から評価を行う。

- OISTは、新規性、革新性及び高い研究・教育の質を備えた学術ポートフォリオを構築しているか。
- 現在のOISTの規模に照らして、学術ポートフォリオ及び研究連携の広がりや厚みは、研究及び博士課程教育を実施する上で適切なものとなっているか。
- コア・ファシリティに整備された研究支援サービス及び研究基盤は、最先端の研究を遂行する研究者を十分に支援できるものとなっているか。
- OISTは、日本国内又は海外における学術的経歴を問わず、世界トップレベルで競争力を有する優れた教員を採用しているか。
- OIST大学院は、学術界及び民間部門の双方において科学技術分野のリーダーとなることを目指す学生にふさわしい、専門能力及びキャリア形成のための研修機会を含む博士課程カリキュラムを整備しているか。
- OIST大学院は、優秀で能力の高い博士課程学生を国内外から確保するとともに、OIST修了生との継続的なつながりを維持するための効果的なアウトリーチ戦略及び手法を確立しているか。



調査付託事項

3 知的資本、技術移転、起業及びイノベーション：OISTにおける基礎研究の成果を、世界的なインパクトを有するとともに、国及び地域社会にとっても意義のある知的資産へと展開・活用するための仕組みが適切に整備されているかを評価する。

特に、以下の観点から評価を行う。

- OISTは、研究ユニットにおける基礎研究の成果から知的資本を発掘・創出するとともに、起業活動を支援するための効果的な管理運営体制及び仕組みを整備しているか。
- OISTは、知的財産・知的資本、産学連携及び公的・民間セクターとのパートナーシップについて、実績を伴った信頼性の高いポートフォリオを構築しているか。
- 知識移転及び技術移転活動の対象分野の広がり並びに活動水準は、研究ユニットの規模及び研究上の強みに見合ったものとなっているか。
- OISTは、沖縄の地域資源や特色を生かしたトランスレーショナル・リサーチ（橋渡し研究）及びその社会実装を推進するとともに、地域・広域・国のイノベーション・エコシステムの優先課題と整合したパートナーシップを構築・運営しているか。



調査付託事項

4 組織体制、管理運営、施設及びインフラ: OISTの次の成長段階を支えるために必要な組織体制、内部プロセス、建物及びインフラの整備状況及び成熟度を評価する。

特に、以下の観点から評価を行う。

- OISTは、大学運営を効果的に遂行するための管理運営体制及び組織体制を確立しているか。
- OISTの経営陣は、世界最高水準の研究・教育を実施する大学として求められる責任を果たすため、リスク管理、大学コミュニティの構成員の健康・安全の確保並びに研究インテグリティ及び研究セキュリティへの対応について、十分な体制を整備しているか。
- OISTは、情報技術（IT）サービス、計算・ネットワーク環境及び情報セキュリティ管理について、世界トップレベルの研究大学と競争できる水準を備えているか。
- OISTは、沖縄という立地に特有の課題を軽減しつつ、優秀な事務職員を確保・維持するための効果的な採用及び人材定着の仕組みを構築しているか。
- OISTは、第2期成長段階における学際的研究・教育及びその他の大学の中核的機能を支えるため、キャンパス全体を対象とした建物及び物的インフラに関する計画を策定しているか。



調査付託事項

5 持続可能な財政基盤、外部資金及び資源計画：ISTの財政基盤の持続可能性及び外部資金獲得戦略について評価する。

特に、以下の観点から評価を行う。

- OISTの経営陣は、中長期的な戦略を策定し、着実に実施するために必要な人材、インフラ及び財源等の経営資源を十分に確保しているか。
- OISTは、年度予算の策定、競争的研究資金等に係る間接経費（オーバーヘッド）の管理及び財務リスクのモニタリングを適切に行うための仕組みを整備しているか。
- OISTは、「外部資金戦略2024–2029」の目標達成に向けて、支援機能を強化するとともに、外部資金の獲得を促進するためのインセンティブ制度を整備・運用しているか。